

地方創生を念頭に置いたソーシャルイノベーション研究プロジェクト

著者

上級研究員 岡田 久典

本年度の研究プロジェクトは、2023 年 10 月 29 日京都市同志社大学で開催された、国際 P2M 学会で開催するセッション「ソーシャルイノベーション」企画を行うことに注力を行った。

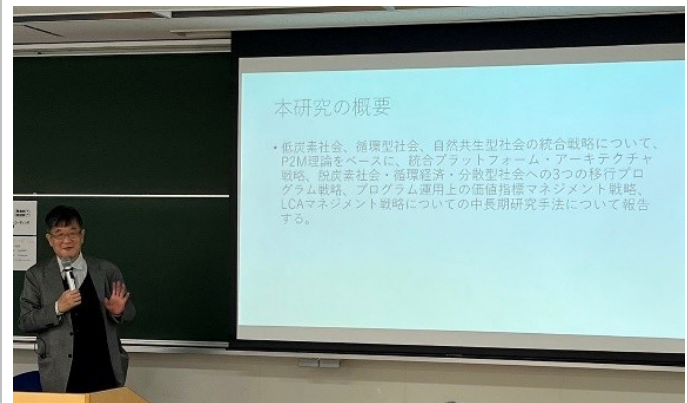
ソーシャル・イノベーションとは、あらゆる種類の社会課題に対応する新しい「戦略」「概念」「理想」「組織」「手法」を示している。そしてその基盤には現代を読み解き、未来をイメージする哲学が必要となる。社会課題の発見をプロセスで生成 AI やテクノロジーをいかに活用するか、課題解決のプロセスをいかにデザインするか。様々な分野で、多様な主体が連携・協働したプログラムを P2M の手法で企画し前に進めていく。その解決策をスケールし、ソーシャル・インパクトを拡大するか。今こそ、このような問題に取り組める、P2M人材が社会に求められている。こうしたことで、学会企画を進めることとなり、登壇者の各位よりメッセージを頂き、企画を推進した。

大会中において、京都大学教授出口康夫氏からは、「GX 時代における哲学、I から We へ」の重要性、同志社大学教授の中嶋愛氏からは、「ソーシャル・イノベーションの新潮流について」、同志社大学中島恵理氏からは「地域循環共生圏とソーシャル・イノベーション」の方向性について言及がなされた。

今回登壇されたのは、京都大学 出口康夫教授、同志社大学中嶋愛教授、イング総合計画代表 斎藤俊幸氏、環境省近畿地方環境事務所環境対策課長兼地域脱炭素創生室長福嶋慶三氏、国際 P2M 学会会長亀山秀雄氏、同志社大学教授大和田順子氏。同志社大学教授中島恵理氏である。

総合すると、人材育成では、日本の人材の多様性の欠如、ネットと共に育った Z 世代、都市部の若者を村で学ばせる意義、若い研究者支援などが。資金調達に関しては、寄付税制の改革、クラウドファンディングの新しい使い方、PPP（官民連携）、金融機関との連携、企業版ふるさと納税、ビジョンやロジックモデルを作成した上での支援団体の調査などについて言及があった。

最後に持続可能な社会の実現に向けた価値観について、「人間中心主義の時代から、人間間そして人類のみならず We を重視する社会へ」（出口氏）、「これからは非競争世代がその強みを活かし、社会的価値を市場価値に変えていくことをしてもらいたい」（斎藤氏）、「これからは地域のステークホルダーを巻き込んだ研究開発が必要」（亀山氏）などのメッセージがあった。



国際 P2M 学会における岡田久典の講演
「ソーシャルイノベーション」



国際 P2M 学会大会会場